

手術を体験する幼児への母親の関わり

— 絵本によるオリエンテーションの母親への影響 —

大池真樹¹⁾

キーワード：母親、オリエンテーション、幼児、絵本、手術

要 旨

本研究の目的は、絵本を使用したオリエンテーションの実施が、幼児の手術に関する母親の理解や、幼児との関わりにどのように影響するのかを明らかにすることである。総合病院の小児病棟に手術目的で計画入院した幼児10名とその母親10名を対象とし、絵本によるオリエンテーションを行い、質問紙調査、参加観察法により得られたデータを質的に分析した。分析の結果、以下のことが示された。①手術を受ける幼児の母親は、絵本を見ることで幼児の手術について具体的なイメージを持つことができていた。②オリエンテーション中から後の母親の幼児への関わりは、母親が研究者の説明を「幼児に合った言葉で補足する」「これから体験することについて話をする・励ます」であった。③母親は絵本で得た知識を基に「幼児をおだてる・行動を促す」という行動をとっていた。④母親の幼児の体験に対する関わりには、研究者の作成した絵本が活用されていた。

Mothers' Involvement with their Children's Surgery

— Effects on Mothers of Surgery Orientation Using a Picture Book —

Maki Oike¹⁾

Key words : mother, orientation ,preschool children, picture book, surgery

Abstract :

The purpose of this study was to determine what kind of effect surgery orientation using a picture book has on mothers in understanding their children's surgery. The subjects were 10 preschool children who were hospitalized for an operation in the children's ward of a general hospital and their mothers. They all received surgery orientation which used a picture book. We obtained data through a questionnaire survey and participant observation.

The mothers were able to obtain concrete ideas of their children's surgery by watching the picture book. During and after the orientation, the mothers explained the surgical procedure to their children in a language the preschool children could understand, encouraged and praised them for their bravery for undergoing the surgery. Also, the mothers used the picture book effectively in dealing with the preschool children.

1) 宮城大学看護学部

Miyagi University School of Nursing

I. はじめに

幼児は、言語能力や認知的機能の発達が不十分であるために、手術に対する不安や恐怖を抱きやすい。しかし、幼児は、医療者や母親との関わりの中で、手術に対する幼児なりの心の準備をすることにより、不安が軽減されている¹⁾。特に、母親から絵本を用いた手術に関するオリエンテーションを受けていた幼児は、内容を具体的にイメージすることができていた²⁾。このように、手術を受ける幼児に対して手術の受け入れを促し、精神的な支援を行う際の母親の役割は大きい³⁾⁴⁾。しかし、幼児の手術は母親にとっても不安が大きい出来事であり、母親の不安を軽減させる看護援助が必要となる。先行研究において、母親の不安は幼児のケアや治療について正確な説明を受けることや、病棟スタッフとの相互作用により軽減する⁵⁾⁶⁾という報告や、母親は幼児へ手術に対する心理的準備を促す関わりを行うことにより、役割達成感を得られる⁷⁾という報告もある。これら先行研究から、手術を体験する幼児と母親によりよい看護を提供する上で、入院中の母親の不安を軽減し、幼児との関わりを促すことは不可欠である、と考えられる。

研究者は、手術を受ける幼児の理解を促す看護援助に関する研究において、幼児が母子への絵本を使用したオリエンテーションや母親との関わりの中で、どのように知っている体験が増え、体験に対する不安が軽減されていたかについて探求した⁸⁾。そこで今回、手術を受ける幼児の母親へ焦点をあて、母子への絵本を使用したオリエンテーションの実施が、幼児の手術に関する母親の理解や、幼児への関わりにどのように影響するのかを明らかにし、手術に関する幼児の理解を促し不安を軽減する母親の関わりという視点で考察した。

II. 研究目的

母子への絵本を使用したオリエンテーションの実施が、幼児の手術に関する母親の理解や、幼児との関わりにどのように影響したかを明らかにすることである。

III. 研究方法

1. 研究対象者

総合病院の小児病棟に手術目的で計画入院した幼児とその母親10名を対象とした。

2. データ収集の期間

2004年5月から8月の4か月間

3. データ収集の方法

1) 質問紙調査

母親に対して、入院や手術に関する幼児への説明内容、説明時の幼児の反応、幼児に説明することに関する母親の思い等について、自作の質問紙を用いて調査を行った。質問紙は入院当日に母親へ配布し、手術後に回収した。

2) オリエンテーションの実施

病棟で施行されているオリエンテーションは幼児を対象としたものがないため、入院当日に、看護師による母親への術前オリエンテーション及び主治医による母親への手術に関する説明終了後に、研究者から母子へ自作の絵本（以下「絵本」とする）を使用したオリエンテーションを施行した。

絵本は、幼児が入院後に体験する出来事を視覚的に捉えることができるように、場面を絵で示した。場面は、入院、病院へ宿泊、術前の絶飲食や着替え、手術室への移動、手術室看護師や医師への挨拶（名前と年を言う）、母親との別れ（部屋の外で待機している）、麻酔開始（マスク使用）、手術（睡眠中に終了）、病室への移動（手または足に点滴がついている）、水分摂取や食事開始、点滴抜去、病院へ宿泊、創部消毒、退院とした。オリエンテーションは、基本的なストーリーは変わらないが、幼児や母親の反応を見てその幼児に合わせた言葉を選びながら施行した。母親へは手術に関する幼児の理解を促す意義を説明し、オリエンテーション後、絵本を使用し母子でコミュニケーションを図るよう対象に依頼した。

3) 参加観察

入院中の幼児と母親の関わりや幼児の言動を、参加観察法により観察した。幼児の反応に

については適宜母親に反応の意味を確認した。観察時は随時メモを取り、観察場面終了直後に観察ノートに記入した。研究者による観察場面は入院時、主治医及び麻酔科医、病棟看護師からの術前オリエンテーション時、研究者によるオリエンテーション時、手術当日の絶飲食開始から手術室入室時、手術室から病棟帰室時（手術当日）、帰室後2時間後、及び退院時とした。また、各観察場面において手術に直接関係する処置の施行や、手術前後の状態観察は病棟看護師に依頼し、研究者は入院や手術に関する説明を中心に幼児や母親と関わった。

4. 分析方法

データは質的記述的に分析した。

各観察場面における観察内容と母親への質問紙調査の記述から、幼児の入院中の体験に関する母親の認識や言動、母親の関わりによる幼児の言動を抽出した。そして、オリエンテーションが母親の認識や幼児への関わりにどのような影響を及ぼしたのか、という視点で分析を行った。分析過程においては適宜、小児看護学研究者、及び心理学研究者にスーパーバイズを受け、分析内容の妥当性を高めるよう努めた。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮として、宮城大学倫理委員会の承認を得た上で、研究について、親に対しては口頭と文書で説明し、幼児に対しては発達段階を考慮しながら口頭で説明した。研究の依頼書には研究協力は自由意志によること、参加の有無による不利益は生じないこと、途中中断の自由、プライバシーの尊重、研究結果は論文及び学会で発表する以外では使用しないことを明記し、同意書を介し同意を得た。

IV. 結果

1. 対象者の背景

総合病院の小児病棟に手術目的で2泊3日の計画入院をした2歳から5歳の幼児10名と、付き添う母親10名であった。母親の年齢は20代1名、30代8名、40代1名であった。幼児の疾患は、鼠径

ヘルニア、陰嚢水腫、包茎、停留精巣であった。

2. 母親の幼児への関わり

オリエンテーション前後の母親の思いと言動を表1に示した。

1) オリエンテーション前の幼児への説明

10名中5名の母親 (f, g, h, i, j) は「手術」という言葉を使用して、幼児にこれから体験することについて話をしていた。1名の母親 (b) は「手術」という言葉は使用せずに「チクチクしてとってもらおう」と、幼児にどのように治療するのか話していた。母親 (f, g, h, i, j) は、採血時の幼児の様子について「心配ない」と答えていた。また、母親 (h) は幼児への説明に対して「これくらいの年になると全部は分からなくても、言ったことの半分くらいは分かるようになるから (中略)」と述べていた。一方、4名の母親 (a, c, d, e) は「子どもが恐がる」「どう話したらいいのか分からない」という理由から、入院前に幼児へ手術に関することは話していなかった。さらに話さない理由について、母親 (a) は「2歳という年齢から、手術は理解できない」、母親 (e) は「(採血時) 3歳位の頃は泣き叫び、10分以上泣きつづけていた」「手術をするまでの処置がスムーズに進まなくなってしまう」と述べていた。そして、母親 (a, c, d, e) は「治す」という言葉を使用して、幼児に入院の目的を話していた。

2) オリエンテーション中から後の幼児への関わり

絵本を使用したオリエンテーション中から後の母親の幼児に対する関わりは、「幼児に合った言葉で補足する」、「これから体験することについて話をする・励ます」、絵本で得た知識を基に「幼児をおだてる・行動を促す」の3つに分類された。以下に母親の幼児への関わりと幼児の言動について述べる。

(1) 「幼児に合った言葉で補足する」

絵本を使用したオリエンテーション中、母親 (c) は幼児の言動を見て「分かっているかなあ」と幼児の理解度を考え、「今はここまでだよ、ここまで行ったらお家に帰れるよ」と、絵本の場面を示しながら幼児に合った言葉で

表1 母親の思いと言動

母親	幼児の年齢と疾患	母親の思いと言動		
		オリエンテーション前	オリエンテーション中	オリエンテーション後
a	2歳9か月 陰嚢水腫	「理解できない」「怖がる」という理由から手術に関する話を幼児にしていなかった	研究者に「手術の時は(幼児が)意識があるまま別れるのか」「麻酔は何時間くらいで目覚めるのか」と質問していた	
b	2歳9か月 鼠径ヘルニア	「痛い痛いところチクチクしてとってもらおうね」「ポコッとふくらんでいることとってもらおうね」と幼児に話していた	母親は「(幼児の鼻を指差しながら)この人誰ですか」「何歳ですか」とオリエンテーションに参加していた	幼児と一緒に再度絵本を見ながら「寝ている間に全部終わってるからね」と幼児が体験することについて話をし、「がんばろうね」と励ましていた
c	2歳10か月 鼠径ヘルニア	「ボンボン(おなか)を先生に治してもらおうね」と幼児に話し、手術に関しては「怖がる」「どう話したらよいか分からない」という思いがあった	幼児の言動を見て「分かっているかなあ」と幼児の理解度を考え、「今はここまでだよ、ここまで行ったらお家に帰れるよ」と、研究者の説明を幼児にあった言葉で補足していた	手術室への移動時、幼児が乗っているストレッチャーについて「いいなあー、これはママは乗れないんだよ、子どもしか乗れないんだよ」と体験をおだてるように話をしていた、退院時に絵本について「これ絵本があってよかったです、なんて言って(手術について)説明したらいいか分かりませんでしたし、絵を見ながら説明することができました、特にうちの子絵本が好きなので、楽しく見ることができました」と話していた
d	4歳1か月 鼠径ヘルニア	「腸がさがらないように病院に泊まって治してもらおう」と幼児に話し、手術に関しては「怖がる」「どう話したらよいか分からない」という思いがあった		母親は幼児と一緒に再度絵本を見ながら「今はどこまで進んだかな、これから動くベッドに乗るんだね」と幼児が体験することについて話をしていた
e	4歳2か月 鼠径ヘルニア、 包茎	「病院に行ってお薬をつけてもらう」と幼児に話し、手術に関しては「怖がる」「どう話したらよいか分からない」「手術について話をすることで、手術をするまでのいろいろな処置がスムーズに進まなくなってしまう」という思いがあった	「退院時はこのくらい歩けるようになるんですか」と研究者に質問し、絵本を見ながら「へえー、これ分かりやすいです、なんとなくイメージできました」と言っていた	手術室入室の際「マスクがきたらすっーと吸うんだよ」と、幼児に麻酔導入時の行動を話していた
f	4歳5か月 包茎	「○○くん(同じような手術をしていた友達)もがんばったから、がんばろうね」と幼児に話していた	手術室入室時の母子分離について説明すると、「お母さんは入れないんだって」と幼児に研究者の説明を補足していた	幼児と一緒に再度絵本を見ながら「こういう風にするんだよ」と幼児が体験することについて話をし、「がんばろうね」と励ましていた
g	4歳9か月 鼠径ヘルニア	外来で主治医から話された内容を幼児にあった言葉で話していた	「子どもには、私から入院の説明をしていたが、絵本を見て入院中の流れが自分で分かったようだ」	
h	5歳1か月 鼠径ヘルニア	家でもわりとオープンに手術についての話をしていた	手術後の食事や排尿について聞くなど、幼児の手術前後の様子について研究者に質問してきた	幼児と一緒に再度絵本を楽しみながら見ていた、手術室入室の際「それじゃ、ここでバイバイだよ」と幼児に声を掛けた
i	5歳4か月 停留精巣	「寝ている間に手術して治してもらおうね」と幼児に話していた		手術室への移動時に看護師が幼児に「手術室でお名前と年、言えるかな」と聞くと、「言えるよね、さっき言ったもんね」と幼児の行動を促した
j	5歳10か月 鼠径ヘルニア	「寝ている間に、右の膨らんでいるところを手術して治してもらおう」と幼児に話していた		幼児と一緒に再度絵本を見ながら手術に関する話をしていた

補足していた。幼児 (c) は「これママとCちゃん?」「こうやって寝るの?」「これ着るの?」「着る、着る」と、絵本の内容とこれから自分が体験することを結びつけていた。また、手術室入室時に名前を言う練習の際、母親 (b) は「(幼児の鼻を指差しながら) この人誰ですか」「何歳ですか」と話しかけていた。幼児 (b) は笑いながら「Bちゃん」と言い、指を2本立て「2歳です」と答え行動が促されていた。

(2) 「これから体験することについて話をする・励ます」

オリエンテーション後、母親 (f) は幼児と一緒に再度絵本を見ながら「こういう風にするんだよ」、母親 (d) は「今はどこまで進んだかな、これから動くベッドに乗るんだね」と話し、母親 (f) は「がんばろうね」と励ましていた。幼児 (d) は絵本を見ながら「次は何をするの?」「これやったよ」と自分の体験を結び付けたり、幼児 (f) は「黄色いベッドに早く乗りたい」とこれから体験することに関心を示していた。

(3) 「幼児をおだてる・行動を促す」

手術室への移動時、母親 (c) は幼児が乗っているストレッチャーについて「いいなあー、これはママは乗れないんだよ、子どもしか乗れないんだよ」と幼児の体験をおだてるように話をしていた。幼児 (c) は嬉しそうにニコニコ笑い、自分の体験を喜んでいた。また、手術室への移動時に看護師が幼児に「手術室でお名前と年、言えるかな」と聞くと、母親 (i) は「言えるよね、さっき言ったもんね」と幼児の行動を促した。母親から行動を促されると幼児 (i) は「〇〇です」と自分の名前を答えていた。さらに、手術室入室の際、母親 (i) が「じゃあね、ここで、あと迎えに行くからね」と幼児に声を掛けると、幼児 (i) は表情が硬くなったが、泣かずに手を振って母親と別れることができていた。オリエンテーション前は手術に関する話を幼児にすることについて「どう話したらいいかわからないから話さない」と答えていた母親 (e) は、手術

室入室の際「マスクがきたらすっーと吸うんだよ」と、幼児に麻酔導入時の行動を話していた。

3. 幼児の手術に関する母親の理解

絵本を使用したオリエンテーション中、母親 (a) は「手術の時は(幼児が)意識があるまま別れるのか」「麻酔は何時間くらいで目覚めるのか」と幼児の手術前後の様子について質問してきた。また、母親 (e) は「退院時はこのくらい歩けるようになるんですか」と幼児の退院時の様子をイメージしていた。そして、母親 (e) は絵本について「これ分かりやすいです、なんとなくイメージできました」と述べていた。さらに、オリエンテーション前は手術に関する話を幼児にすることについて「怖がるから話さない」「どう話したらいいかわからないから話さない」と答えていた母親 (c) は、退院時に絵本について「これ絵本があつてよかったです、なんと言つて(手術について)説明したらいいかわかりませんでしたし、絵を見ながら説明することができました、特にうちの子絵本が好きなので、楽しく見ることができました」と話していた。

V. 考察

1. 母親の思いと幼児への説明

入院前、手術に関する話をしていなかった母親は、幼児が過去の医療体験に対して恐怖心を示したことから、手術に関して幼児に話をすることで幼児が恐がり手術を受けられなくなるのではないかと、という思いを抱いていた。また年齢が低いと理解できないと考えていた。手術に関して幼児が理解できない、過去の医療体験から手術を恐がり嫌がるという母親の思いが影響し、入院前に母親は幼児に手術に関する説明をしていなかったと考えられた。一方、「手術」という言葉を使用して、幼児に入院の目的を話していた母親は、採血時の幼児の様子について心配ない、母親の説明を幼児が理解できると認識していた。母親は、普段の幼児の様子から理解度を把握し、またこの子ならこれから体験することに適応できるという思いが影響し、幼児に手術に関する説明をしていたと

考えられた。

2. オリエンテーションが母親へ与える影響

オリエンテーション前から幼児に手術に関する話をしていた母親も、話をしていなかった母親も、オリエンテーションに参加し、その後も幼児に絵本を使用してこれから体験することを話し幼児を励ましていた。そして、オリエンテーション中に母親は研究者に幼児の手術前後の体験について質問していた。母親はオリエンテーションや絵本を見ることにより幼児の手術前後の様子を知り、幼児の手術に関する知識が深まっていたと考えられた。母親から幼児へ手術に関する説明を行うためには、母親は幼児の手術前後の流れや説明の仕方、説明する意義を知る必要があり⁹⁾¹⁰⁾、手術前後の流れを知ることによって、母親は落ち着いた気持ちになる⁷⁾¹⁰⁾。母親は、オリエンテーションにより幼児の手術に関する母親の理解を深め、励ますなど幼児への情緒的支援が促進されたと考えられた。そして、絵本は、母親から幼児にこれから体験することを説明する時の手段となっていた。

また、日帰り手術に関する研究において、親は幼児の個性を反映させながら期待する幼児の姿を実現するために、あまりうそはつきたくない、など親の姿を想定し、幼児への関わりを考えていることや、家族に対して、子どもの発達段階に応じた心理的準備に家族が取り組んでいけるような援助の必要性が述べられている¹¹⁾。本研究において、オリエンテーション前、幼児に手術について話をしていた母親も、話をしていなかった母親も、オリエンテーション中に幼児の理解度を把握しながら、その幼児にあった言葉で研究者の説明を補足していた。そして実際に幼児が体験している時には、絵本によって得た知識を基に幼児の体験をおだて、行動を促し、幼児の反応に合わせた関わりをしていた。母親は幼児の日常の様子から、体験に対する幼児の反応を予測し、幼児に合った関わりを行っていたと考えられた。幼児の力を引き出し、尊厳を守る関わりにおいて、母親や家族の協力は不可欠であり¹¹⁾、本研究においても、幼児は最も信頼できる母親が側にいて行動を促すことで、不安な体験において術前の手術に関する行動

が促されていた。

このように、絵本を使用した母子を対象としたオリエンテーションの実施は、幼児の体験に対する母親の関わりを促進し、幼児は母親の関わりにより行動が促され、母子双方の手術に取り組む力が引き出されるための援助につながると考えられた。

VI. 研究の限界

本研究は一施設における調査であり、分析対象となった事例も少なかったことから、研究者による絵本を用いたオリエンテーションによる母親の関わりへの影響や幼児の言動は限られており、本研究結果を他の疾患による入院や手術を体験する幼児の母親へ適用するには限界がある。また、研究者によるオリエンテーション以外の要因が、母親の理解や幼児への関わりに影響していた可能性を否定できない。今後、症例数を広げ入院や手術を体験する幼児の親への看護援助の方法を探求していく必要がある。

VII. 結論

母子へ絵本を使用したオリエンテーションを実施したことによって明らかになった幼児の手術に関する母親の理解や幼児への関わりへの影響について、以下のことが示された。

1. 手術を受ける幼児の母親は、絵本を見ることで幼児の手術について具体的なイメージを持つことができていた。
2. 絵本を使用したオリエンテーション中から後の母親の幼児への関わりは、母親が研究者の実施した手術オリエンテーション説明を「幼児に合った言葉で補足する」「これから体験することについて話をする・励ます」であった。
3. 母親は絵本で得た知識を基に「体験をおだてる・行動を促す」という行動をとっていた。
4. 手術を体験する幼児に対する母親の関わりには研究者の作成した絵本が活用されていた。

謝辞

今回、貴重な学びの機会を提供して下さった患児・家族の皆様、病院スタッフの皆様にご心より御

礼申し上げます。また、研究のご指導をいただきました宮城大学の武田淳子教授、山田嘉明教授に深く感謝いたします。本研究は、宮城大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたもので、第15回日本小児看護学会において発表したものです。

文 献

- 1) 松森直美、二宮啓子、蝦名美智子 他：「検査・処置を受ける子どもへの説明と納得」に関するケアモデルの実践と評価(その2) 子どもの力を引き出す関わりと具体的な看護の技術について. 日本看護科学学会誌, 24 (4), 22-35, 2004
- 2) 中垣紀子：母親が術前オリエンテーションに参加する意義の検討. 神奈川母性衛生学会誌, 2 (1), 41-49, 1999
- 3) 山本靖子、菅弘子、橋本育世 他：小手術を受ける子どもの心理的準備(2) - 両親による子どもへの支援 - . 神戸市立看護短期大学紀要, 16, 37-45, 1997
- 4) LaMontagne, L. L., Hepworth J. T., Johnson, B. D. et al. :Children's preoperative coping and its effects on postoperative anxiety and return to normal activity. Nursing Research, 45(3), 141-147, 1996
- 5) Ziegler, D. B., Prior, M. M. :Preparation for surgery and adjustment to hospitalization.. Nursing clinics of North America, 29 (4), 655-669, 1994
- 6) Bradford, R., Spinks, P. :Child distress during hospitalization : implications for practice. Clinical otolaryngology and allied sciences, 17 (2), 130-135, 1992
- 7) 小野智美：子どもが日帰り手術を受ける母親の手術前の対処行動と関連要因及び手術中と手術後の適応の結果への影響 - ソケイヘルニアに焦点をあてて - . 日本看護科学学会誌, 19(3), 83-90, 1999
- 8) 大池真樹：手術に伴う短期入院中の体験に対する幼児の理解 - 幼児と母親に絵本によるオリエンテーションを実施して - . 日本小児看護学会誌, 15 (2), 61-67, 2006
- 9) 木村千恵子、日沼千尋、木村しづ江：先天性心疾患患児への手術の説明(第1報) 家庭内で患児に行われている説明内容とそれに影響する要因. 東京女子医科大学看護学部紀要, 1, 53-60, 1998
- 10) 込山洋美、筒井真優美、飯村直子 他：検査・処置を受ける子どもと親のずれ. 日本小児看護学会誌, 10 (1), 9-16, 2001
- 11) 小野智美：プレパレーションに家族が望んでいること - 子どもの日帰り手術に向けて親が想定する子どもの心理的な準備をとおして - . 小児看護, 29 (5), 640-646, 2006